

### 197. 副腎腫瘍における $^{131}\text{I}$ -Cholesterol シンチグラフィの診断的意義

神戸大学 放射線科

熊野 町子 吉田 祥二 松本 晃  
井上 善夫

京都府立医科大学 放射線科 前田 知徳

〔目的〕副腎腫瘍における  $^{131}\text{I}$ -Cholesterol シンチグラフィの診断的価値を検討する。

〔方法〕 $^{131}\text{I}$ -Cholesterol 1 mCi を静注し、7日後に1000孔コリメータでシンチフォートを腹臥位にて撮像した。対象は Cushing 症候群5例(過形成4例, 腺腫1例), 異所性 ACTH 分泌腫瘍2例, 原発性アルドステロン症3例, 特発性アルドステロン症2例, 褐色細胞腫1例, 異所性褐色細胞腫1例, 並びに正常6例の計20例である。

〔成績〕正常では両側副腎に僅かな陽性像が得られたが、肝への軽度の集積を示すため右副腎は判別し難い。Cushing 症候群の中、腺腫の場合は病巣側に明瞭な陽性像が描画され、対側には集積を認めなかった。原発性アルドステロン症では腺腫側に明瞭な陽性像をみ、対側にも陽性像を得るが病巣部に比し集積は少なかった。両側に陽性像として描画され集積度にも左右差が認められない。過形成型 Cushing 症候群並びに特発性アルドステロン症ではデキサメサゾン抑制試験を行うと共に副腎への  $^{131}\text{I}$ -Cholesterol の集積は陰性化し、両疾患群への鑑別は臨床検査成績なしでは困難であった。しかし腺腫と過形成との鑑別は容易で、腺腫ではデキサメサゾンにより  $^{131}\text{I}$ -Cholesterol 集積に変化を及ぼさず手術適応の決定に重要な示唆を与える。後腹膜充气造影で副腎腫大を認めた褐色細胞腫に於けるシンチフォート像は陰性で、腫瘍が副腎髄質に由来することが示唆された。

〔結語〕デキサメサゾン抑制試験使用の  $^{131}\text{I}$  コレステロールシンチグラフィは副腎腫瘍の質的診断をある程度可能とし後腹膜充气造影術、血管造影術に先立ち施行されるべき検査法である。

### 198. 糖尿病患者における膀胱シンチフォート

大阪市立大学 放射線科

越智 宏暢 福田 照男 玉木 正男

同 第二内科

西本 儀正 曾和 悦二 藤井 暁

関 淳一 和田 正久

膀胱シンチフォートを行なった糖尿病患者108例(インスリン必需型糖尿病24例, インスリン非必需型糖尿病84例)について糖尿病の病態と膀胱シンチフォートの描出状態との関係について、糖尿病の病型、罹病期間、合併症等、二・三の観点から検討を加えた。

〔方法〕膀胱シンチフォートは無処置で  $^{75}\text{Se}$ -Selenomethionine 200  $\mu\text{Ci}$  静注後、30分~40分にて東芝ガンマカメラを用い、頭側方向に10度傾斜して仰臥位で撮像した。また一部の症例については RI 静注後10分、30分、50分の経時的膀胱シンチフォートを施行した。描出状態は正常群、やや低下群、低下群、不能群に分類し、更に膀胱の部分的な描出状態についても検討した。

〔結果〕①インスリン必需型糖尿病24例(平均罹病年数8.3年)中描出正常と判定されたものはわずか2例(8.3%)であった。②罹病期間が長いものに膀胱の描出異常を示すものが多い傾向がみられ、特に罹病期間が11年以上の15例中描出正常と判定されたものは1例にすぎなかった。③経過中の糖尿病のコントロールとの関係についてみると、コントロール不良な症例で描出異常を示すものが多い傾向がみられた。④肥満の有無ならびに飲酒歴と膀胱の描出状態の間には一定の関係はみられなかった。⑤糖尿病性網膜症と膀胱の描出状態の関係についてみると、描出正常群では網膜症を認める頻度が低い傾向がみられた。⑥経時的膀胱シンチフォートで、膀胱の描出に変動のなかった16例と、10分よりも30分、50分の方がより良く膀胱が描出された20例とを比較すると、後者で罹病期間が長く、高血圧・動脈硬化を合併する症例の多い傾向がみられた。⑦その他、膀胱の部分的な描出低下例についても検討を加えた。